

## Chaucer 研究

I have, God woot, a large feeld to ere,  
And' wayke been the oxen in my plough.  
The remnaunt of the tale is long ynough.

— Knight's Tale 886—88.

榊 井 迪 夫

### 第 2 部 主として解釋的研究

第 1 部は Chaucer の「主として語学的研究」を扱い、これを ANGLICA Vol. 2, No. 3 (関西大学英语学会発行) に載せた。ここでは、その続篇として第 2 部「主として解釈的研究」の方向を扱うことにする。本稿だけを読まれる方の参考のために、第 1 部において扱った内容を摘記すれば次の通りである。

#### 1. 1900年までの Chaucer scholarship

#### 2. 1900年以後の Chaucer scholarship

(1) テキスト編纂・索引の作成

(2) 出典と類話の研究

(3) 言語と韻律の研究

(a) F. Wild の Chaucer の語形研究

(b) Final-e の最近の論争

(c) 韻律と散文リズム

(d) 語彙研究

(e) 文法・統語法研究

(f) Chaucer's English とその口語性

(g) Rime-Index の作成

本稿は断るまでもなく、1900年以後の Chaucer 解釈の方向を授う。これを次のような順序に従つて記述する。

第2部 主として解釈的研究

1. 歴史的環境の研究
2. 解釈・批評の推移
3. 作品研究 (デイト決定、テーマの研究等)
  - (a) The Book of the Duchess
  - (b) The House of Fame
  - (c) The Parliament of Fowls
  - (d) Troilus and Criseyde
  - (e) The Legend of Good Women
  - (f) The Canterbury Tales
4. 解釈と研究の新しい方向
5. 結 び

は し が き

この半世紀における Chaucer 学の進展には、まことに眼をみはらせるものがある。殊に今世紀の Chaucer 学をリードしてきたのはアメリカである。英国の Chaucer 学は W. W. Skeat の Chaucer テクストの編纂の完成 (1894) を以て頂点に達した感があるが、次の世紀はアメリカの諸学者の寄与が圧倒的である。その最大の成果は J. M. Manly and E. Rickert, *The Text of The Canterbury Tales* 8 vols. (Chicago Univ. Press 1940) であつたろう。これに就いては第1部において詳説した。アメリカの Manly, Kittredge, Lowes, Tatlock, Carleton Brown などの碩学は Chaucer 研究に偉大な貢献をなしてきた。このような Chaucer の熱烈な愛好者の努力によつて Chaucer の理解は深くなり、拡大され、今や Milton

をしのいで Shakespeare につぐ詩人とさえ評価されるに至つた (J. M. Manly, *Some New Light on Chaucer*)。これには Chaucer の言語の性質、特に発音、韻律、用法、語義等や出典の理解に資する研究が累積されてきたことが与つて力があつたろうし、更に中世時代への認識が中世専攻学者によつて喚起され、Chaucer の時代環境や生活がその諸方面において著しく明らかにされてきたことや詩人が現代の好尚に合つたことも亦有力な原因であつたろう。その中でも直接に Chaucer を理解するための背景として先ず歴史的環境の諸研究を一瞥することにしよう。

## 1 歴史的環境の研究

この方面の古典的な名著に G. M. Trevelyan, *England in the Age of Wycliffe* (London 1909<sup>+</sup>) と J. J. Jusserand, *English Wayfaring Life in the Middle Ages (XIV th Century)* (London 1925) がある。G. G. Coulton, *Chaucer and His England* (London 1921<sup>3</sup>) もその歴史的環境を Chaucer と密接な接触を保ちつつ詳説した名著である。これは一面著者の Chaucer 解釈をも示しているので、解釈の項目で更に触れるであろうが、ここでは同じ著者の *Social Life in Britain from the Conquest to the Reformation* (Cambridge Univ. Press 1918) が、中世の諸資料を項目に従つて配列してあり、専門家に貴重である点を指摘しておこう。これにもまして、G. G. Coulton, *Medieval Panorama* (Cambridge Univ. Press 1938<sup>1</sup>, 1949<sup>7</sup>) は推奨される。この大著によつてノルマン人の征服以来宗教改革に至るまでの中世の凡ての面が龐大な資料を根柢として統一的に叙述されている。Chaucer の Prologue の描写が当代の風潮、習慣、生活を如何に如実に現わしておるかは、このような背景を知ることによつて、よく認識さ

れ、読みの理解を助けられる。殊に「村落」(The Village)、「騎士道」(Chivalry)、「修道院」(The Monastery)、「都市」(The Town)、「家庭生活」(Home Life)、「法と警察」(Justice and Police)、「科学」(Science)、「女性生活」(Women's Life)、「結婚と離婚」(Marriage and Divorce)などの章は readable である。又専門的には、Eileen Power, *Medieval English Nunneries* (Cambridge 1922)、G. R. Owst, *Literature and Pulpit in Medieval England* (Cambridge 1933) 等もあげなくてはならない。科学に就いては、W. C. Curry, *Chaucer and the Medieval Sciences* (New York 1926) が代表的な著述である。この著のお蔭で我々は中世科学に関する詩人の知識を親しく知ることができるようになった。

一方、Chaucer の生きていた時代を再現しようとするのは Edith Rickert の年来の夢であつた。彼女は Manly 教授と協力して、*Canterbury Tales* のテキストを編纂する大事業を文字通り、寝食を忘れて遂行する傍ら、Chaucer 時代の諸種の記録類を蒐集することを忘れなかつた。Rickert 女史はもと14世紀の一般生活の諸断面を例証しようと考えていたが、後にはこれらを結晶し、一人の典型的な14世紀人の生活に限定して資料を選択することにした。それが集められ、「Chaucer's World」(New York, Columbia Univ. Press 1948) となつた。しかし彼女は過労のため、1938年になくなり、その資料をこのような書物の形にまとめあげたのは、Manly 教授の奨めによつて事にあつた Clair C. Olson と Olson が更に共同編集を依頼した Martin M. Crow の二人である。

この労作は、その名に背かず、Chaucer の世界を再現するものとして独自の価値を持つている。内容は、「ロンドンの生活」、「家庭」、「修練と教育」、「経歴」、「娯楽」、「旅行」、「戦争」、「貧富」、「宗教」、「死と埋葬」の十章から成り、中世時代、ことに14世紀人の経験し

たであろうと思われる事項が、当時の資料の適当な選択と配列によつて示されている。それらの資料は現代語に訳されており、適当な註がそえられているから、一読すらすらと理解される。これを読みつつ、随所に Chaucer の息吹を感じさせるのは、恐らく詩人が実際に見聞したであろうと察せられる出来事が巨細になまの資料として提供され、しかも巧みに編集されているためであろう。そこに編集者、殊に故 Rickert 教授の Chaucer への愛憎を感じるのは、筆者だけではないであろう。その中の記録の若干を拾つてみよう。

「ロンドンの生活」(London Life) の章では、街上の喧嘩の記録があるかと思うと消燈の晩鐘 (curfew bells) が或るきまりの教会から鳴らされた以後は、外出を禁止し、居酒屋 (tavern) も閉じなくてはならぬというふれが載っているし、真夜中に大声で街路を通る一群の人々を制しようとして飛び出した男の方がかえつて殺されたという記録、さては牛肉の培つたのを鹿の肉と称して善良な市民に騙し売りするのを禁じる布告 (それが実際あつたので禁止の必要があつたのは無論のこと)、Smithfield の家畜市場を清潔にしてほしいという請願から、その具体案として馬一頭、豚四頭の売買につき、売手も買手も一ペニづつを出し合い、その金で修繕費にあてるという策や、'eve-cheapings' と称する夜店を日没の前後一時間に限つてほしいという請願、その理由に、時間の制限がないと善良な市民を悪所に誘惑する恐れのあることをあげているのや、街の騒擾を鎮めるために市長自ら組合頭 (alderman) を引つれて現場にかけつけるという精彩ある資料もある。子供の記述になると、彼らに街路でボール遊びや危険な遊戯をやめさせないと教会のガラス窓 (ガラスは貴重品であつた) を壊したり、石像を破壊するなどの注意もある。これだけでも実に多彩な市民生活の一面を知ることができ、六百年以前の英国は、あたかも現代の如くに彷彿として現前す

る。而もこれらの資料に現われるのは皆、具体的な名の市長であり、市民であり、街路であり、教会である。

中でも、Chaucer の生年を推定する有力な資料となつた Sir Richard le Scrope と Sir Robert Grosvenor の紋章使用に関する訴訟事件 (1386) は当代の知名の人士 (Knights) 数百人を證人によんだ大事件で詩人の知人や友人も現われるが、自身も1386年10月15日に證人に立つている。この訴訟の四つの証言がここにも採録されているのも興味深いが、更に関心をそそられるのは、Chaucer の Prologue に描写される貿易商 (Merchant) のモデルになつたかも知れない Maghfeld という何度も組合頭に選ばれたことのある男から、騎士や市民や商人が多数、金を借りている記録のあることである。その記録を読んでゆくと、John Gower, Esquire (あの詩人の Gower であるのか疑わしいが、或はそうであつたかも知れぬ) の名が見え、更に驚くことには、

Geffray Chaucer owes for a loan on the twenty-eighth day of July, to be repaid on the following Saturday .....26s. 8d. という記録のあることである (Ibid., p. 192)。このような余り多くない金子を而も僅かの期間に借りの必要が詩人にあつたかどうか、疑問とされる節もあり、われわれの詩人 Chaucer であつたかどうかは、これだけの記録では不明とされているが、不思議な親近感を与えられるのは事実である。Chaucer が Prologue で描いた人物には、当時の生きたモデルが存在したのではないかという大きな誘惑を感じた Manly 教授の気持も、このような記録を探索しているうちにも自然に強められたのであろうと同感される。これについては、Manly, *Some New Light on Chaucer* の項を参照。

要するに、この 'Chaucer's World' の全体には、Chaucer の眼にふれ、耳にきいたであろう当時の生活や社会現象が記録の編集だ

けて精彩に示されている。その上 Rickert 教授の妹 Margaret の選んだ五十数葉の当代の絵(写真版)がまた心憎いまでに Chaucer とその時代の雰囲気を感じさせる。

ここに Eileen Power 女史(1899—1940)の好著、Medieval People(1924, 1951)もあげるべきであろう。これは中世の社会史を社会の種々の階層から一人の人間を選びだし、それを中心として叙述したもの。その人の周囲の生活環境や時代の雰囲気を背景に描いてあるので甚だ魅力的である。ここでとりあげたのは、僧院生活の叙述に Prologue の尼僧院長 Madame Eglentyne が選ばれ、歴史家の立場から見たこの魅力的な女性があたかも生きた人のように、その環境の中に躍動しているからである。E. Power 女史は Chaucer の詩行のもつ含蓄を繊細な感覚と中世の深い学殖によつてよく描き出したと言える。

## 2 解釈・批評の推移—年代的に

アメリカの学者が Chaucer の文学的研究として、尊敬を以て引き合いに出す先駆的な業績は、T. R. Lounsbury, Studies in Chaucer 3 vols. (1892)である。筆者は未見であるが、Root, Robinson, Shelly, Patch などの著書によつて察するのには、Chaucer の持つ健全性(sanity)をよく理解していたことと彼の所謂 Chaucer legend—Chaucer は Cambridge ないし Oxford 或はその両大学で教育を受けたろうという伝説と法学院(Inns of Court)の一つ、即ち Inner Temple で法律を学んだろうという伝説—<sup>註(1)</sup>を提供したことが屢々語られる。その一章 Chaucer の学識(The Learning of Chaucer)は今なお第一流の価値を持つものとされる。詩人のこの教養、学識の問題は現在では多くの方向に展開し<sup>註(2)</sup>つつある。これについては第1部出典・類話の研究を参照。

今世紀になつて Chaucer 解釈を大きく前進させたのは、何と言つても、G. L. Kittredge, *Chaucer and His Poetry* (Harvard 1915) である。この書は1914年 Johns Hopkins University で行われた六つの講義—*The Man and His Times*, *The Book of the Duchess*, *The House of Fame*, *Troilus and Criseyde*, *The Canterbury Tales I. II.*—から成る。この講義は、長い歳月にわたるこの碩学の研究と思索と学殖とが渾然と融合したもので、それが格調の高い英語で述べられている。一度書物となるや、あたかも啓示の如く、これはすべての研究者を魅了し去つた。中でも、*The Book of the Duchess* の夢の心理(dream-psychology)の説明において、未だ嘗て人の頭に閃くことのなかつたような洞察を剃刀のような鋭さで解剖した論説は、現在古典的な定説である。又 *Troilus* を現代的な意味における最初の心理小説とする彼の主張—‘the first novel, in the modern sense, that ever was written in the world, and one of the best’ (Ibid., p. 109) / ‘that masterpiece of psychological fiction’ (Ibid., p. 109)—は既に議論の余地がないように思われる。*The Canterbury Tales* においては、殊に *Miss Hammond* によつてその存在を発見された ‘*Marriage Group*’—*Wife of Bath’s Prologue and Tale* を以て始まり、*Franklin’s Tale* を以て終る—に最初の劇的展開を与えたことは、彼の大きな功績である (*Chaucer’s Discussion of Marriage*, 1912)。本書では、その展開を巨匠の筆致を以て解明しているが、これは最も独創的な文学批評をなしている。Harvard 大学の H. E. Rollins はこの書の新版 (Oxford 1951) の序文において「Kittredge 氏は、彼を愛さなかつた人々には、高慢ともなり、氣むずかしくもあつたかも知れないが、彼を求めてくる人々には初夏のような親しみをみせた」(Cf. *Hen. VIII* IV. ii. 54)と記している。Kittredge 教授は今尚 Harvard の伝説的な存在である。



次にソルボンヌの碩学 E. Legouis の Geoffroy Chaucer(1910)は特筆さるべきである。この英訳 Geoffrey Chaucer は 1913 年に出たが、今なお読まらるべき価値を持つている。それは著者のテキストへの深い理解に基いているからであろうか。処々に示唆的な解釈があり、明晰で我々に親しみ易い。Kittredge の著書がいわば圧倒的な印象を与えるのと好対照である。殊に Chaucer の真の理解はフランス人でなくてはできない点を強調する。Chaucer は 'French in spirit' であるからだと言ふ。Chaucer 詩の彼のフランス語訳の三、四が英訳版の附録に載っているが、それは甚だ巧みで、よく Chaucer の tone を伝えている。一例を有名な尼僧院長の描写にとれば次の如くである。原文と対照されたい。

## Chaucer

Ther was also a Nonne, a Prioress,  
 That of hir smylyng was ful symple and coy;  
 Hire gretteste ooth was but by Seinte Loy;  
 And she was cleped madame Eglentyne.  
 Ful weel she soong the seruice dyvyne,  
 Entuned in hir nose ful semely,  
 And Frenssh she spak ful faire aud fetisly,  
 After the scole of Stratford atte Bowe,  
 For Frenssh of Parys was to hire unknowe.—Prol. 118—126.

## Legouis 訳

Et nous avions une dame Prieure  
 Dont le sourire était tout simple et coi.  
 Son grand serment était "par Saint Eloi!"  
 Elle chantait très décemment du nez  
 Les chants divins à la messe entonnés.  
 Dame Eglantine (on la nommait ainsi)

Parlait français le plus pur et choisi,  
 Comme on le parle au couvent de Stratford,  
 Car le français de France ignorait fort.

Legouis の Chaucer はフランス人の書いた中では、最良とされているが、これと並んで L. Cazamian, *The Development of English Humour* (1930) もまた年代は降るが、フランスからの Chaucer 学への寄与である。Cazamian は Chaucer の humour—特にその slyness—をフランスの 'humeur de finesse' と連関的に説明するが、それは Chaucer 解釈に多くの光りを投じる。その文章の見事さと相俟つて、詩人の調子を微妙な感覚でとらえ、これを巧みに説明する。次の文はよくその一斑を示しているであろう。

From the opening sketches of the Prologue, the sense of a singularly attentive and sure manner grows upon the reader. Things are said quietly, with ever so slight a tremor of consciousness, and over the canvas that a leisurely hand fills with full-length portraits of men and women, there plays ever so discreetly a lambent flame of irony through the smiling light.—Ibid., p.110.

最近 (1952) Duke University Press から Part I (Shakespeare の humour を中心とする *The Renaissance*) を含む大著となつて現われた。

Legouis の言うように、フランス人は Chaucer の韻律をよく理解しうる筈であるが、近年まで Chaucer 解釈に「驚くべき無関心」(A. C. Baugh) を示してきたのは、Chaucer 研究にとつて確かに不利なことであつた。フランスの学者は、Chaucer が深く影響を受けた Machaut, Deschamps や Froissart の作品をよく理解しうる利益があることを思えば、この無関心は「甚だ説明し難いと言わねばならない」(A. C. Baugh)

これより先に、「歴史的環境」の項でふれた G. G. Coulton, *Chaucer and His England* (Methuen 1908, 1927<sup>+</sup>) が英国から現われた。Medievalist である Coulton 博士はその広い学殖に加えて豊かな想像力を持ち、その二つを融合して時代的環境の中に Chaucer を見事に浮彫りにしたが、中でも、Chaucer の少年時代、若き Chaucer、イタリー紀行等の章は出色である。必然的に「半ば理論的、半ば事実的」(half-theoretical, half-factual) (G. Kane) とならざるを得ない Chaucer の理解に対して、歴史的資料をこのように巧みに詩人の生涯と融合したところは彼の想像力の優れていることを証している。これは最近の H. S. Bennett, *Chaucer and The Fifteenth Century* (Oxford 1948) を予想させるであろう。Coulton 博士のこの歴史的な立場が却て、G. K. Chesterton から「14世紀の批評は、悉く20世紀の批評でもあるべきだ」という強い反駁にてあつた理由でもあつた。

1920年代以降になると、Chaucer のみならず、中世という時代的背景についての知識の急激な進展によるためもあつたろうし、恐らく時代の好尚に合つたためもあろう、この詩人は嘗ての如何なる時代におけるよりも、その繊細さや微妙さや複雑さが深く理解されてきたことが注目される。

J. M. Manly, *Some New Light on Chaucer* (1926) は一時期を劃するセンセーショナルな書物であつたと言つてよい。Manly 教授は、Chaucer は今や Milton をぬいて、Shakespeare の王座の次に位する詩人であると言う。Rickert 女史との協力による research の貴重な成果を示すこの *Some New Light* の眼目は何処にあつたか。Manly はその Prologue の理解を通して、そこに現われる人物の迫真力の故に、生きた現実のモデルの存在を実証しようとするのがそれであつた。Chaucer の Prologue の記述

には嘘がないと言うのは、またかの偉大な歴史家 Trevelyan である。Some New Light の面白さは一つにそのモデル追求の過程にある。Manly が古記録に見える三つの言及中より、Prologue の Our Host, Harry Bailly はロンドン南郊の Southwark に実在し、その地区を代表して議会に打つて出た Henri Bailly なる市民であつたろうという推論を下すのは、その典型的な一例である。Manly は文献調査の過程を叙説した後に、言う。「かくして我々はチョーサー時代の陣羽織屋の主人は実際に Harry Bailly という名であつた、従つてキャンタベリ物語の宿の主人は彼をモデルにしたものであつた、と結論しても大丈夫差支えはない」(Ibid. p. 83)

Chaucer の殊に Prologue の各行がそれ程の迫真力を持つていることは、誰しも同感する所である。これは 'life-size' (N. Coghill) にえがかれる。しかし、現在の解釈は、詩人がモデルとして思い浮べた人物はあつたかも知れないが、一或る場合には恐らくあつたであらう—それは Manly 教授が主張しようとした特定の個人ではなくて、詩人の観察と経験と想像の所産であるとするのに落着いていようである。しかし、そのために Some New Light の価値が減ずるものではない、むしろ Manly 教授の真理追求の熱情こそ、将来にかけてこの書を読む人を興奮させずにはおかないであろう。その最後の章「芸術家としての Chaucer」は、詩人の芸術的展開の道程を論じた傑出した一章である。殊に Chaucer に特徴的な技巧(例えば *imagery*)と人物描写の観察には精彩があり、且つは新しい方向を暗示する。

更に Manly, Chaucer and the Rhetoricians (Warton Lecture on English Poetry XVII 1926) も名著の評が高い。本書は現在入手不可能らしく、残念ながら、一読の機会を得ないが、ラテンの修辭法の影響を Chaucer の表現の中に見出したことは、上記の

Some New Light 中の言説からも充分察することができる。

Chaucer における修辭法、文体、更にその詩と聴衆との関係、等に就いて、ここで一言ふれることは、それが新しい解釈の一出発点となつたという意味で、あながち不適當ではないであろう。

15世紀の Chaucer の讃仰者 Lydgate などは、Chaucer の詩を修辭の華として仰いだのであつた。これはその時代の Chaucer の受けとり方として興味のある事実であるが、今世紀になつてその意味の深いことが明らかにされた。Chaucer の時代、即ち14世紀の英国は複雑な過渡期であり、新旧の思想や生活様式が顕著に対照されつつ、急激に新時代へと向つていた。Chaucer を含む当代の知識人の心理は、ソフィステイケートされ、複雑であつたとされる。Chaucer の詩の文体は一見単純でありはするが、決してナイーブではないのである。詩人は、その好みもあつたかも知れないが、又当時の英語の統語法の制約もあつたであろうが、単純な文体を充分意識していたのである。逆に言えば、意識的に、表現の単純化を自らのスタイルとしたのである。Chaucer の修辭法に対する知識は深く、殊にラテンの修辭法に精通していた。それと共に、フランスの Machaut や Deschamps などを筆頭とする当時流行の詩の技巧派の影響も、彼は多く受けた。それは音楽に合せて歌いうる詩であつた。従つて Chaucer には修辭や音楽的韻律等についての意識が、絶えず念頭にあつたであろう。こうして、彼が中世的な作文規範である「高い文体」(stylus altus)、「中位の文体」(stylus medius)、「低い文体」(stylus humilis) の微妙な使い分けを聴衆とその話し手及びその話の主題に応じて試みていることが、具体的に明らかにされてきた。文体の質の識別である。彼の有名な「言葉は行為の従兄弟たるべし」(The wordes moot be cosyn to the dede. — Prol. 742.) の意味も彼においては、そのような背景において理解されな

くてはならない。Chaucer は 'philologist' (K. Sisam) であり、'language-conscious' (C. L. Wrenn) であつたのである。殊に、その詩をきく聴衆—宮廷人、紳士淑女、聖職者、官吏、ロンドン商人等—があり、詩人はこれらに多くの知人や友人を持ち、彼らを楽しませるために詩を書いた。この詩人はまた口話的文学の伝統も知っており、語り物の調子を以てその物語りを詩に綴つた。そして、響のよい押韻語を選んだのであつた。そこで、彼の詩に 'oral delivery' の要素の多いことも当然である。これらの問題は、Ruth Crosby, *Chaucer and the Custom of Oral Delivery* (Speculum XIII 1938), B. H. Bronson, *Chaucer's Art in Relation to his Audience* (Five Studies in Literature, Univ. of California Publications 1940) の中にとり上げられ、展開される。

先ず Crosby の研究では、Chaucer の中に「話を朗誦し、声に出して読む習慣」(the custom of reciting tales and reading aloud) に連なる表現が多いことを指摘し、それらが殊にロマンスの技巧に影響されていることを強調しようとする。ロマンス作者が屢々用いる metre を補充する 'line-filler'—Icred and lewid, lief or loth, wele or wo, rich and poor, etc.—や、誓言 (swearing) の種々の形式や 'shortly' (手短かに申せば) などの詩人の愛用語句をこの立場で見るのである。

又 Bronson の研究では、これらの口話的技巧がその詩並びにその聴衆に与える影響について詳察される。彼の結論は Chaucer の聴衆は非常に敏感な、教養ある聴衆であつたとする。これに先だつて 1928年ドイツの H. Lüdeke が、その「チョーサーの叙事詩における語り手の機能」(Die Funktionen des Erzählers in Chaucers Epischen Dichtung—Studien zur englischen Philologie の一篇) において、この問題に鉤を入れたことが注目される。

1920年代の特筆すべき他の業績は、Shakespeare's Imagery を以て一時期を劃した C. F. E. Spurgeon 女史の大著である。即ち、'Five Hundred Years of Chaucer Criticism and Allusion 1357-1900' 7 parts (1914-24) がこれで、Chaucer Society の刊行にかかる。Chaucer 批評史としてこの労作も亦一時期を劃したものと云つてよい。従来我々は Chaucer に関する言及を断片的に文人や学者等の著作の中に見出したのに過ぎなかつた。この大著を得て、14世紀から19世紀の終りに至るまでの Chaucer に関するすべての言及や批評が蒐集され、時代による Chaucer の評価の相違と推移を細大洩らさず知ることができるようになった。これによつて見るに、Chaucer の英文学に与えた影響は深く且つ永続的であることがわかる。この徹底的研究の成果の或るものを要約した同女史の 'Chaucer devant le Critique en Angleterre et en France depuis son temps jusqu'à nos jours' (Paris 1911) は、上記の大著出版以前に博士論文として提出された。このようにして、英国のみならず、フランスにおける Chaucer の評価とその影響が明らかにされた。Chaucer の影響に比べると、Froissart や Montaigne が英国に与えた影響は物の数ではないことを知る。

少し前後するが、R. K. Root, *The Poetry of Chaucer* (1906 初版 Houghton Mifflin Co. Rev. ed. 1922) は今尚 best work としての価値を持っている。プリンストン大学の R. K. Root 教授(今次大戦後逝去)には、Troilus のテキスト編纂の傑れた業績があるが、この書においては当時達し得た Chaucer 研究のすべてを消化し、「これらの研究の成果を Chaucer の読者に近づき易いものにしよう」(1906) と意図している。更に15年間の Chaucer 学の進展にともない、1922年に改訂版を世に送つた。第一章において樂しき英国 (merry England) の素描から説きおこし、中世と文芸復興

期の相違を対照しつつ、思想、宗教、芸術、政治、新しい国民精神の勃興、知的活動等を要約し、「しかし、14世紀英国の世界が、いたましい程に調子が狂っていたとしても、決してよどんでいるのではなかつた。その知的な発酵においてこの時代は偉大なエリザベスの時代と殆んど同じ性格を持っていた」(p. 12) と言う。第二章は Chaucer を総括的に記述しているが、その全貌を僅か三十頁ばかりで述べた力量は非凡であり、賞讃に値しよう。先ず Chaucer の作品と外国よりの影響を述べ、ついで詩人の性質、その天才の性格等について論ずる。それは、Chaucer 学を根柢にした正鵠をえた説であり、その中に著者の独自の見解や関心の方向を知ることが出来る。外国からの影響では、フランスの Jean de Meun からは、後に詩人の性格のインテグラルな部分となつた心的態度—人生を喜劇の観点から見る思想傾向—を学んだし、ラテンの Ovid からは、その数多の物語を得たのは勿論、Ovid のもつ優美とくつろぎ、生彩な描写力、その豊かな色彩と形象への感覚を学び、イタリーの Boccaccio からは、個々の人間への興味や高度の芸術性や知的な刺戟を受容したとする。更に Chaucer の寛容な性質、懐疑的態度、カトリック的精神からその偉大さの特質の分析や叙情性の乏しい詩人の限界 (limitation) にまでふれる。最後に詩と人生態度に健康性 (healthiness) と平衡感 (poise) のあることを説き及々に将来の研究問題を暗示する。そして他の章は個々の作品の詳細な評価である。The Poetry of Chaucer は、まことに標準的な著述と言つてよい。

The Road to Xanadu (1927) の出世作を以て文芸批評に独自の地歩を築いた J. L. Lowes も Chaucer 解釈を前進させた有数の、ハーヴァード系の学者である。Chaucer については、The Art of Chaucer (1930)、Geoffrey Chaucer (1934) 等があり、又 research



work が多い。殊に Legend of Good Women の Prologue の出典註(3)(source)研究において、Chaucer が Deschamps(Lay de Franchise) と Froissart (Dittie de la Flour de la Marguerite) の雛菊の詩 (marguerite-poems) をよく知っていたという事実を解明したことが貴重な寄与であろう。著書では上記の Geoffrey Chaucer (1934) は名高い。これは1932年 Swarthmore College で行つた講義を集めたものであるが、その中で詩人の影響を蒙つたフランス詩人の本質を述べた The World of Books の章や現実と教養との両面において、詩人の形成されてゆく道程とその詩的發展を跡づけた章は出色と言わなくてはならない。又彼の Convention and Revolt in Poetry (Houghton Mifflin Co. 1922) の名著も処々に Chaucer の獨創性を Chaucer の具体的な詩行において、創作的或は心理学的に解説していることを附記しておく。最近再版が現われた。

一方、英国からは G. K. Chesterton, Chaucer (1932) が出た。本書で Chesterton の狙う所は、従來の歴史的批評の立場でなく、20世紀の立場において、而も、専門学者の erudition の中に閉じこめられた Chaucer を俗人 (laymen) のために解放するにあつた。殊に熱情をかたむけて詩人の偉大さを説いた箇所は、Chesterton の本領であろう。なお、Chaucer の現代語訳に一家の見識をもつていることも注意してよい。即ち彼は Chaucer の詩行を大体そのまま註(4)残すのがよいと言う。

1933年 F. N. Robinson, The Works of Geoffrey Chaucer (Boston. Houghton Mifflin) が現われ、Chaucer 研究の新しい出発を予想させたが、殊に1940年以降、現在に至るまで15年間ばかりの間に、Chaucer 研究は更に新しい躍進をとげてきた。これに就いては4)「解釈と研究の新しい方向」で問題とし、次に、Chaucer

の個々の作品についての、今世紀における研究の経過と成果のあらましを考察することにする。

### 3 作 品 研 究

研究の中心は作品である。Chaucer においても個々の作品はあらゆる角度から研究されてきた。ここではその代表的な説や解釈の一斑を、主として A. C. Baugh, F. N. Robinson, R. D. French などの著書を参照し、私見を加えて解説することにする。

#### (a) The Book of the Duchess 1369-70

この詩は Lancaster 公爵夫人 Blanche の死 (1369) を悼むエレジイとして書かれた所謂 'occasional poem' とされている。このことは早く T. Tyrwhitt (1730-86) の時代からわかつていた。今世紀における発見は主として特殊な意図、詩行、などの出典に関するものである。特に Kittredge はこの詩と Machaut との関係を明らかにした。A. C. Baugh はこの詩を「Ovid やフランスの詩人の記憶を基にした種々の観念のモザイク」とするが、その主題とその運びは詩人自身のものである。詩人の習作であるこの詩は屢々因襲的 (conventional) であると批評されるけれども、当の貴婦人をもその実際の観察をもとに描いた点は魅力がある。最近、B. H. Bronson は 'The Book of the Duchess Reopened' (PMLA LXVII 1952) において、この詩を夢見る人 (Dreamer) と詩人との融合の立場において見ようとしている。即ち、詩人 Chaucer は自らの主観を表面に出さないで、夢見る人の考えとして描き出した、そこに礼節 (etiquette) と優雅 (delicacy) とをわきまえていた宮廷人の洗練された配慮があるとする。屢々問題となる唐突な結末も決して単純な動機からではなく、Blanche 夫人の夫 John of Gaunt に対

する詩人の気持が支配していたのであるとしている。この詩全体を通じて感情の運びは一貫している。筆者は Blanche 夫人の描写に詩人の不思議なくらいな情熱を感じる。

### (b) The House of Fame 1374-82

上記の作につく重要作品。制作のデイトも推測以上を出ないが、現在の知識では一先ずもつともなものとされる。ここでは詩のテーマの意味が問題とされてきた。そのいずれも決定的であるとは言えない。19世紀に行われた通説は、鶯の象徴する冥想(Contemplation) 或は哲学の女神(Philosophy) が詩人を日常生活のわずらわしさから、逃避させたことを暗示する「寓意的自叙伝」であるとする。この説は古く Sandras が提示し、Ten Brink が流布したものである。Kittredge や Sypherd がその説の不充分なことを明らかにした結果、現在は信じられない。しかし、Chaucer の自伝的な一面も持っている。それは周知のように、殊に詩人の税関吏時代の生活の一部を暗示する Book II ll. 652-660 の箇所である。Sypherd は 'Studies in Chaucer's House of Fame' (Chaucer Society 2nd Series 1907) においてこの詩は恋愛をテーマとする夢の詩であつて、その背後に隠された意味はないと言う。殊に Sypherd がこの詩とフランス詩の love-vision とを比較し、その文芸的由来に就いて考察した点が貴重である。

### (c) The Parliament of Fowls 1381-2

一般に 'occasional poem' とされるが、優勢な意見として J. Koch と彼を発展した Emerson のものがある。彼らはこの詩をボヘミアの Anne 女王と King Richard との婚約を祝つて書かれたとする。Hinckley と Manly がこの意見に反対し、殊に Manly

は、この詩の中にコンヴェンショナルな求愛詩 (demandes d'amour) の型を見ようとする。その他、「詩人の心的態度から由来する」(Langhans)、「John of Gaunt の娘 Philippa の結婚を暗示する」(E. Rickert) など、幾多の説が提出され、今世紀もこの詩に対し、関心を示してきた。A. C. Baugh は Koch—Emerson の説が最も妥当であろうと言っている。

(d) Troilus and Criseyde 1381—87 <sup>註(7)</sup>

この長詩は特に芸術作品として理解することが最も望ましい。これが現在における Chaucer 学の結論であろう。従来試みられてきたこの作品の研究の方向は (1) 原典 *Il Filostrato* との比較研究、(2) 宮廷風恋愛 (Courtly Love) の規約の下に詩人が原典を如何に変容したかの問題、(3) Troilus, Pandarus, Criseyde の性格研究 (所謂 '心理小説' と劇的構成としての考察の立場)、(4) ロマンソとしての見方 (K. Young) 等である。

先ず Boccaccio の *Il Filostrato* との比較研究に基礎を置いたのは、W. M. Rossetti であつた。<sup>註(8)</sup> 爾来我々はこの作品に就いて豊かな知識を持つようになった。殊に、Karl Young, *The Origin and Development of the Story of Troilus and Criseyde* (Chaucer Society. 2nd Series XLI 1908), K. Young, *Aspects of the Story of Troilus and Criseyde* (Wisconsin Studies in Lang. and Lit. II 1919) 等はその方面を開拓した業績である。

次に、宮廷風恋愛 (Courtly Love) の体系についての知識が要請される。これは、後期中世文学に現われる貴族男女間の関係に見られる一種の社会規約であり、中世教会の教義とは対蹠的に異なる。<sup>註(9)</sup> 主要点は婦人が絶対の権力を持ち、愛人は婦人の 'servant' とされることである。この恋愛の倫理は秘密を守ることを第一義と

し、その情事を通して騎士の品性、教養が高められるとするにある。この意味において Chaucer の *Troilus and Criseyde* には中世的伝統である宮廷風恋愛が根柢にある。しかし Chaucer はこの伝統を現実には相当に変容し、劇的とし、性格を創造したことが偉大とされる。この点を強調するのが、20世紀批評の功績であり、Kittredge は、最初の心理小説とした。この20世紀批評の立場に対して、C. S. Lewis は中世の伝統に立つ見解を発表した。即ち 'What Chaucer Really Did to Il Filostrato' (*Essays and Studies XVII* 1931) がこれである。Lewis は「Il Filostrato が Chaucer の手において受けた変容の過程は何よりも先ず中世化 (medievalization) の過程であつた」(p. 56) という注目すべき発表をした。彼はその理由を主として宮廷風恋愛の歴史的な立場に求めたのである。この主張に対し、A. C. Baugh は、それはこの作品を再び中世に引戻すものとして反対するが、C. S. Lewis には中世の伝統の方が比重がはるかに重い。後の *The Allegory of Love* (Oxford 1936) の著者にとっては、20世紀的批評は Chaucer の理解の拡大ではあつても歴史的証明には堪えぬものであると考えるのであろう。宮廷風恋愛を究明する方面の業績も現われた。即ち、W. G. Dodd, *Courtly Love in Chaucer and Gower* (Harvard Studies in English I. Boston 1913), T. A. Kirby, *Chaucer's Troilus: A Study in Courtly Love* (University, Louisiana 1940) が殊に優れている。

性格研究は Chaucer を扱つた殆んどすべての書物に現われている。この詩は人間性への深い洞察、人物の関係、殊に Criseyde の性格—*Her tendre herte, slidyng of corage*—*Troilus V. 825.* —の複雑と微妙な点に就いて種々の解釈が試みられてきたことを注意しておこう。

最後に、宮廷風恋愛の歴史主義と性格描写の心理主義のみを強調すると、他の大切なロマンスとしての要素が不当に隠されてしまうのは、正当な評価ではないことを指摘しなければならない。この点を、Karl Young は 'Chaucer's Troilus as Romance' という PMLA 総会における発表において強調した。現在ロマンスとしての見方、その伝統の研究は中世英文学研究の一方向として盛んである。要するに Troilus は、Chaucer の最も偉大な芸術的成果であると言える。

#### (e) The Legend of Good Women 1386-95

Chaucer は英詩において始めて heroic couplet をこの詩で用いた。周知のように、Canterbury Tales の橋渡しとなる作品。先ず興味は、この詩の Prologue に集中されてきた。今世紀になつて決定された問題の一つは、Prologue の F-version (Skeat 版の B) の方が G-version (Skeat 版の A) より先に書かれた点を発見したことにある。Prologue は二つの versions で残されており、その一つの G-version (Cambridge Univ. Gg.4.27) と呼ばれるのは、唯一つの写本で、他の F-version (MS. Fairfax) と呼ばれるのは、11の写本で、残っていた。G-version は従来一般に初期の草稿と考えられ、Skeat や Globe 版の編者によつてそのように取扱われた。Ten Brink がこの伝統的な考えに疑問を抱き、G-version の方が F-version よりも後に書かれた、それも恐らく1393年以前ではなからう、という意見を発表した (Englische Studien XVII)。それ以来、その priority の問題で議論がわかれ、繰返えされた。Ten Brink 説に賛成した Lowes と Tatlock の論議が決定的となり、遂に F-version に優先権が与えられたのである。Robinson 版はそのように扱っている。この問題を文体的に決める手順を最近、

Kemp Malone が試論的に発表した。即ち、A Poet at Work : Chaucer revising his Verses (English Studies Today ed. C. L. Wrenn, Oxford 1951) である。Malone 博士は、FとGの第27行から第39行にわたる詩行を夫々詳細に比較検討する。中でも、Fの27、32、36の各行は、'run-on line' (行またがり) であるのに、Gでは同じ詩行が 'end-stopped' である点を比較し、「チャーサーは行またがりをなにか韻律的に劣つたものと見做したように思われる、たとえ彼がそれを全然除外したわけではなかつたのは明らかであるとしても」(Ibid., p. 99) と述べている。更に、上記の詩行の構造の比較から、Gの方が構造に緊迫度が強く、洗煉され、均衡がよりよくとれている点よりして、純粹に技巧の立場からすれば、Gの方が明らかに勝つておるとなし、詩人がその反対の方向へ改訂することは考えられない故に、Gの方が後に書かれたのであろうと想像する。然し、改訂の理由は単に審美的な考察だけで説明できるかどうかは疑問である。この詩に就いては、尙色々の疑問が残されている。例えば、Chaucerはこの詩を実際に未完のままで書きやめたのか、それならば、何故未完の詩が12の写本で残されておるのか、何故未完の詩において、Prologue だけは改訂をなす必要があつたのか。これらの疑問に対して、現在の知識では答えることができない。

#### (f) The Canterbury Tales 1387—1400

テキストの問題は Manly-Rickert の The Text of The Canterbury Tales の批評でふれた。テキストのことでは、その背景に次の興味ある疑問がおこる。(1) 我々の種々のテキストは、いわば Chaucer の机上看見された材料から由来するものかどうか。(2) Tales の諸断片は、既に Chaucer の或る友人たちの手に

渡っていたのかどうか。(3) 写本のいずれかに見られる Tales の配置は Chaucer がなしたのかどうか。殊に (3) の疑問については、Carleton Brown と Tatlock の対立的意見を第 1 部テキスト編纂の項で述べた。(1) (2) については、現在の知識では答えられない。

次に Canterbury Tales の構造に就いての問題が論議され、研究されたことを指摘したい。即ち Tales に枠 (frame) をつくつて統一する技巧である。これは、中世では長い歴史があり、H. B. Hinckley, *The Framing-Tale* (MLN XVIII 1934)、K. Young, *Novelle of Sercambi* (Kittredge Anniversary Papers, Boston 1913) に詳しい。巡礼の枠をはめているのは、偶然 *Novelle of Sercambi* と軌を一にするのであるが、Chaucer がこの先人の書から暗示をえたかどうか疑問である。Chaucer は K. Young の言うように *Novelle of Sercambi* を知っていたかも知れないが、彼の構想は独創的であるとする点で現在は一致している。尙 Tupper は、Chaucer が七罪悪 (*The Seven Deadly Sins*) によつて Tales を組織したという大胆な説を出したが、これは支持者を持たない。

Chaucer と Decameron との関係に就いては、イタリーとドイツの学者は詩人が Decameron に負う所あるのを支持してきたけれども、それは実証されておらない。詩人が Decameron から借用した有力な一例も今までに見出されていない。これより重要な問題の提供は、大きな枠の中に小さい、統一性のある話の群 (group) が存在することを発見したことである。即ち、Miller 対 Reeve, Friar 対 Summoner の喧嘩 (quarrel) を一つのテーマとしていることや数箇の Tales の中に結婚の問題を中心のテーマにしているらしきことを知つたのがそれである。殊に後者は 'Marriage Group' と呼ばれ、その発見は Miss Hammond の功績に帰せら



註(10)  
れる。

更に個々の Tale に就いての研究は、絶えず論究が発表され、新鮮な解釈を試みようとする努力している現状である。この問題はここでは割愛する。

#### 4 解釈と研究の新しい方向

「過去25年間ないし50年間に Chaucer の生涯の事実や彼の作品の年代、テキスト、出典について非常に多くのことが書かれてきたので、詩人としての Chaucer の意味を見失う若干の危険があるかも知れないくらいである。そこで私は、彼の詩に力点をおき、Chaucer を学問的研究の主題として述べるとか、その時代の歴史家、例証家として述べるとかするよりも、むしろ、芸術家として絮説するような書物も江湖に迎えられるでもなかろうと感じた」

これは Percy V. D. Shelly が1940年に出版した 'The Living Chaucer' (Univ. of Pennsylvania Press) の序文において謙遜に語った言葉である。この言葉—芸術家としての Chaucer—の意味は、その後15年間に現われた種々の書物や論文において、深く又多方面に追求されてきた。それは半面、Chaucer 学がこの50年間に驚異的な発展をとげ、充実してきたことを物語っている。1933年に出た F. N. Robinson, *The Complete Works of Geoffrey Chaucer* がその scholarship の充実をよく知らせるが、又1940年の Manly-Rickert, *The Text of The Canterbury Tales* も、殆んど空前絶後の critical text となるであろう。Chaucer 学はさらに前進している。しかし、「詩人としての Chaucer の意味」はその故に真に評価されたであろうか。ここにおいて作品を文芸的な全一体として価値づけるという新たな批評・解釈の立場が強くと要請される。この目的にそうために、テキストの深切、精確な読みと分析が必要とな

る。それは作品の構造 (structure) や構成 (texture) を一つの課題とし、構造に必然的に involve される詩的技巧 (poetic device) を省察する立場と言つてもよい。このような立場を一つの新しい方向と考えるならば、従来の所謂鑑賞的態度ないし心理的解説などはもはや批評の名に値しない。今や、Chaucer に関するあらゆる知識—その生涯、その環境、その出典や原典、その言語、等にわたるすべての知識—は総合され、integrate されなくてはならない。そしてその足場をテキストに求め、作品の芸術的評価に赴かなくてはならない。Chaucer は Chaucer によつて解釈されねばならない。ちようど数百年にわたる Dante scholarship が積み重ねられた後に、いや積み重ねられつつある間にも、'Dante must be interpreted by Dante.' (ダンテはダンテによつて解釈されねばならぬ) とたえず警告されてきたように。

この方面における二三の業績を眺めてみる。

先ず B. H. Bronson, *The Parlement of Fowles Revisited* (English Literary History XV 1948) は、主に想像の域は出ないけれども、この Parlement の詩は何か時事的な事件を祝うために書かれた因襲的な 'love-vision' を作り改めたものであろうと暗示する。これより成果のあがつたのは、Chaucer がその材料を如何に使用するかという観点から、詩人の芸術的な方法を考察する方面である。例えば、B. J. Whiting, *Chaucer's Use of Proverbs* (Harvard Studies in Comparative Literature XI 1934) は、その先鞭をつけた。これは更に R. M. Lumiansky, *The Function of the Proverbial Monitory Elements in Chaucer's Troilus and Criseyde* (Tulane Studies in English II 1950) において、一層明瞭である。Lumiansky の Chaucer 的諺言の分析は、先ず (1) 諺言的材料が文芸的使用に可能かどうかに関する考察。(2) Troilus 5巻の各々

における Chaucer の使用した諺言的要素の分析である。

Lumiansky の分析と考察は Whiting をはるかにぬき、徹底的且つ明快である。彼は Chaucer のこの諺言的材料の使用が、人物相互間の劇的な関係を構成する上にインテグラルな部分をなしておるとし、その材料がこの詩の劇的構造の中に如何に織りこまれているかという点を明らかにしている。

一方、Charles Muscatine, *Form, Texture, and Meaning in Chaucer's Knight's Tale* (PMLA LXV 1950) も、この詩、*Knight's Tale* の構成について精深な洞察を試みた最近の収穫である。その根柢は、形式 (form) は意味 (meaning) を示現する、という批評の立場である。Muscatine は *Knight's Tale* の構造分析にあたり、登場人物において、又、その場面と行動と描写において、調和と均衡のあることを見出し、「この詩の構成の特徴をなしている秩序 (order)こそ、この詩の意味の精髓でもある」と言う。その考え方の一例は、*Knight's Tale* の文体は ornate であると従来言われたが、単なる修飾ではなくて、その詩の一般的構成と関連しているとする点など。即ち、その文体は貴族生活のあや模様に豊艶さを与え、その speech は、この詩の実体となる声調を高揚するという。この詩の中心に坐する Theseus は秩序を象徴し、その両側に Palamon と Arcite との劇的な人物を配し、均衡—それは屢々劇的な皮肉ともなる—を対照的に保っている。かくして、この *Tale* は動きのない、単なるストーリーではなくて、'poetic pageant' となり、その材料はすべて、貴族生活の性格を表現する構成に資するものとなる。これが詩人の考えた構成であり、詩人の構成力であつた。更に、C. A. Owen Jr., *Chaucer's Canterbury Tales: Aesthetic Design in Stories of the First Day* (English Studies XXV No.2 1954) は、*Knight's Tale* のプロット並びに構造に対

応 (parallelism) と逆説 (paradox) が、基底にあることを論じ、Miller's Tale と Reeve's Tale とにおいても同じ対照、逆説が見られるとしている。このような対照と逆説が詩人の第一日の Tales の技巧であると言う。

このように形式と内容の連関の中に、Chaucer の詩を省察するのは一つの新しい方向である。その方法の出発はテキストをあるがままに微細に分析する所から始まる。この意味において、最近の英国の Chaucer 批評には注目すべきものがある。Nevill Coghill, *The Poet Chaucer* (Oxford 1949, 1950) は、詩人を英文学における最も偉大な喜劇詩人とし、彼を喜劇詩人とした特殊の天賦や種々の偶然的事情を識別する。それらの才能や事情は英国的であると同時に14世紀のキリスト教国の全教養に根ざしたもので、詩人の中に喜劇的なヴィジョンとなつて成熟するのである。その詩才発展の過程は、Chaucer 学を根柢とする著者の作品解釈に基き、例證される詩行の選択と説明とには著者の優れたセンスが見られる。H. S. Bennett, *Chaucer and The Fifteenth Century* (Oxford 1948) に扱われた Chaucer の項には、時代環境を恰も Chaucer の眼を通して映ずるものとして描き出し、Chaucer の詩的展開を述べ、詩の解釈、韻律と Speech, 表現技巧等の説明に精彩がある。ここでも詩人としての Chaucer が中心を占める。これらは、従来の Chaucer 学と新しい英国的な批評態度との融合を予想させるが、その点を更に明瞭に打出すのは、John Speirs, *Chaucer The Maker* (London 1951) と Raymond Preston, *Chaucer* (London 1952) であろう。John Speirs は、*Scrutiny* 誌により、殊に F. R. Leavis の Dante のテキスト分析の方法を Chaucer に適用し、その詩における Chaucer 的性格を発見しようと試みてきた。このとき、Speirs は、従来アメリカの学者が出典 (sources) に見出したような価値に疑

惑を持ち、Chaucer 自身のテキストに重点をおく。Speirs の上述の著において先ず我々に新鮮に訴えるのは、‘English’ に対する彼の根本的な態度であろう (Chaucer and Shakespeare なる一章)。Chaucer の英語即ち ‘Chaucer’s English’ は、Chaucer の属する社会一本質的には農業的性格をもつ社会—に深く根ざしたものであり、Chaucer の英語はこのような社会に属する英語の初期の成長の一面であり、それは他のヨーロッパの言語や文学と共に成長し、Chaucer に至つて Chaucer の英語となり、Shakespeare に至つてそれは更に複雑な Shakespeare の英語に成就 (fulfil) されたものである。このような内面的な伝統の立場から Chaucer の英語に迫ろうとするのは、今までの解釈に見られなかつた。然し、Speirs の Chaucer The Maker の後の数章でこの立場が強力に実証されているとは言えないようである。

R. Preston, Chaucer も英国現代の批評態度をよく表わしている。彼は序文で言うように「Chaucer の作品を現代の読者に ‘interpret’ する」ことを眼目にする。言う所の ‘interpret’ するの意味は、「20世紀の読みが14世紀の読みの否認ではなくて、発展であることを見ようとする、それは即ち20世紀に対しても或る深い意味をもつ発展であるかも知れないかどうかを見ようとする」ことである。T. S. Eliot の言う ‘historical sense’ を自らのものとし、テキストを通して詩人の創作態度に迫る。Preston の知性は complex であり、二重、三重の微妙と複雑さを感じ覚する。Chaucer がこのような知性で解剖される時、それは14世紀の読みの発展となり、この詩人は始めて真に現代的意味を持つ存在となるであろう。例えば、Prologue の Knight の完全さ (He was a verray parfit gentil knyght.—Prol. 72) は単に理想的にえがかれたという理想化 (a completely ideal figure—F. N. Robinson, p. 754) の意味ではな

くて、この Knight の達しえた完全さ、一個の人間の達しえた完全さ、として見ることを詩人は意図したものであると言う。

最近の動きとして、Chaucer の芸術へ新しく批評的洞察を試みようとするのは、Elizabeth R. Homan が 'Kinesthetic Imagery in Chaucer'(1949)について、Troilus における情緒的進展 (emotional progression) や Legend of Good Women の Prologue G の調子 (tone) と構造のテーマを扱おうとしていることや H. R. Patch が Chaucer の批評的研究の発表を企図していること (R. R. Purdy) などにかがわれる。又 Warsaw 大学の M. Schlauch 博士は Chaucer の Troilus と Shakespeare の Troilus and Cressida の比較研究を英国の中世研究誌 *Medievum Aevum* に寄稿したと私信に伝えている。最近の同博士の関心から言つて、文体はその比較の一焦点となるであろう。

ここ15年間のアメリカにおける解釈は如何であろうか。Shelly, *The Living Chaucer* によつてその詩を芸術的に解釈するという意図が表明されたことは、この項の冒頭に述べた。この方向は何も Shelly に始まつたものではなく、Kittredge, Lowes, Tatlock など偉大な学者の著書には、それらがよくうかがわれるのであるが、問題は、小さい研究においても、作品を全一的な文芸的、構造的価値をもつものとして措定し、その中の詳細をも絶えずインテグラルな一部としてみようとする傾向が強まつてきたことであろう。そして言語的な立場では、殊にその表現技巧や文体を新しく解釈し直そうとする方向であろうし、詩人の性質や創作態度等とその表現とを密接な連関の中にとらえようとする方向であろう。これらは、現在の主要な研究傾向であると言つてよい。ここでは、最近数年間、我々の眼にふれたアメリカ人の三、四の著書を一瞥することにする。即ち、H. R. Patch, *On Rereading Chaucer* (Harvard

Univ. Press 1939, 1948<sup>2</sup>), J. S. P. Tatlock, *The Mind and Art of Chaucer* (Syracuse Univ. Press. 1950), W. W. Lawrence, *Chaucer and The Canterbury Tales* (Oxford 1950), Kemp Malone, *Chapters on Chaucer*(Johns Hopkins Univ. Press 1951) G. H. Gerould, *Chaucerian Essays*(Princeton Univ. Press. 1952) 等である。

Patch の *On Rereading Chaucer* は、Lounsbury の言う詩人の健全性の概念を現代に生かし、Chaucer の平衡感(sense of proportion) を重視する。著者はそれを一つの根柢とし、Chaucer の不断の読みを中心とし、scholarship をわきまえつつ、随所に主観的な解釈を試みる。一、二の小さい点を示すならば、Troilus and Criseyde の最後の笑いは、Chaucer の笑いではなくて、Troilus の笑いであるとする。従来の評家の或る人たちは、これを詩人の笑いとしたのでその詩行が破壊的な効果を生じるとしたが、それを Troilus の笑いとすることによつて均衡感は破れない、まして皮肉な笑いではないとする (p. 61)。或はその詩のもつ tone から Chaucer が想像をかきたてられて描いた女性は Lady Blanche と Prioress であるとする (p. 149) のや Chaucer の Prologue では人物の書き始めが常に意味が深いと暗示するなどは、その読みのすぐれていることを示すものであろう。Tatlock, *The Mind and Art of Chaucer* は、審美的、芸術的に詩人を理解しようと試みたこの碩学の最後の著述となつた。彼は、詩人の 'tone, pitch, key, mode' を知ること深く、それらを自らの血肉とし、飽きることなくこの詩人に傾倒する。彼が要求する再解釈は、subtle で独創的である。例えば、Chaucer の人物の性格の微妙さは、最初には殆んど気付かれないが、次第に累積されて人格となつてくる趣がある。それは通り一べんの読者には軽くスケッチされているとしか見えないだろうと言う

(p. 42)。これは Canterbury Tales の人物においても言える。Chaucer は実に、見る眼を持つている人々のために書いたことは疑うことができない。

W. W. Lawrence の Chaucer and The Canterbury Tales は、解釈と研究とが渾然と一つになり、而も説く所は正鵠を失わない近來の好著である。Canterbury Tales は、何よりも先ず '芸術作品' (a work of art) であるとし (p. 41)、その realism のために、技巧的な要素を忘れてはならないと警告する。殊にフェブリオの話と Retraction (Parson's Tale の後につけられた詩人の取消しの文) に就いての考察は新鮮である。又 Tales の順序の問題と Marriage Group の展開に就いての説明は殆んど最後の見解となるであろう。

Kemp Malone の Chapters on Chaucer も亦、Chaucer の作品をすべて芸術作品として見る立場に立ち、殊に博士の関心はその表現や文体に強く見られる。殊に Canterbury Pilgrims の性格を文芸的な立場から分析した最後の三章は興味深い読み物である。Legend of Good Women の F と G の Version の文体分析に就いては作品研究の項でふれたが、ここでは代名詞の用法への言及を一例としよう。即ち、Prologue ll. 43-714 における人物描写において一人称の代名詞を含む表現 - I gesse, I trowe, I telle, us, etc. - をあげ、「…くだけた、会話の効果を強めるのが、これら代名詞の文体的機能である」(p. 148) と言う。このような行き方は、内面的というよりは、外形的な文体への顧慮が特色であり、我々にも比較的近づき易いであろう。

Gerould の Chaucerian Essays は百頁ばかりの小著であるが、内容には教える所が多い。特に Pardoner's Tale において、その始めの詩行と説教の部分とに必然的な連絡のないのは、Pardoner



の語調より見て、その inebriety (泥酔) のため、首尾一貫を欠いたのは当然であるとする。或は Wife of Bath の魅力は、彼女が本能的に、無意識のうちに現わしてくる性質—それが一般には、女性の性質である—にあるとする。このようにして彼女は個性的でありつつも、自らの個性を越えて更に 'individual' となると言う。一方、Chaucer の芸術における pity の要素に深い関心を示し、その特徴を「詩人が表現の用い方や事件の進め方に適切な抑制を加え、静かに読者や聴衆の pity を喚起する用意を持っている」点に見る。Chaucer の才能の限界 (limitations) を述べる最後の章は最も問題적이다。Gerould は Chaucer が The Pearl や Sir Gawain の詩人や Piers Plowman の詩人のように、頭韻詩を試みなかつたのは、詩人の能力の限界の一つではなかつたか、或は、Chaucer が英語の散文の改善に殆んど為す所がなかつたのもその限界の一つではなかつたか、と言う。このような Gerould の言う、芸術家としての Chaucer の限界に対して、W. W. Lawrence は、Chaucer のような詩人であれば、The Pearl や Sir Gawain の詩の価値をよく知っていたであろうし、散文の改善にしても、Chaucer がなそうと試みたのであれば、何かのことをなすとげたであろう、という見方が公平な判断のように思われると言う (Speculum, April 1953 書評)。

Gerould が自ら編纂した The Prologue and Four Canterbury Tales (New York, The Ronald Press Co. 1952) の序に Chaucer に就いての要約がある。それは、以上の記述をしめくくるのにふさわしい言葉のように思われる。

「マンリイ教授は言う。即ち、Chaucer は嘗て 英語で書いた三人の偉大な詩人の一人として今や確固たる地位をえていると。この挑発的な言説は一代前ならばひどく攻撃されたであろうが、今で

はそれ程攻撃されそうにない。その理由は彼の詩が前よりも一層注意深く研究されてくるにつれ、詩人の天才の真価が徐々に着実に認められてきたからである。Chaucer は人間生活の表面 (surfaces) をあたたかく、ヒューマニズムを以て観察した人であるばかりでなく、広範囲で力強い想像力をもつ、心の鋭い、非常に賢い、詩人であると理解される。自らの技巧のあらゆる詳細について詩人の精通せることは、まことに完全といつてよく、不注意な読者は往々それを技巧として認めることが全くできなかつたくらいである」

Gerould は簡潔に、この世紀の傾向を語ると共に現代の Chaucer 学が達した詩人の本質的な理解を我々に教えている。

## 5 結 び

以上の記述は Chaucer 解釈の辿つてきた歴史を私なりに前後に脈絡をつけようと試みたものである。文献の不足の箇所はもとより多くて、それらを読むことのできないのが、残念であるが、然し、知られるだけで、それらの諸研究の中に解釈の傾向や意図や修正等にわたり、一すじの道を開いておくことは、私自身にとって必要な研究の道程であつたので、一応の絵図をえがいてみた。座右において、参考にしたのは、A. C. Baugh, *Fifty Years of Chaucer Scholarship* (Speculum 1951), Rob Roy Purdy, *Chaucer Scholarship in England and America: A Review of Recent Trends* (Anglia Bd 70 Heft 4 1952) であつた。これらの紹介がなかつたなら、私自身敢えて筆をとる勇氣は起らなかつたであろう。しかし、これらの紹介、批評に於ても言い尽せないところはあり、私は私なりの考えに従つて記述した。

我々が上に見てきたように、次に来るべき Chaucer 研究は、如何なる問題であれ、従来の營々たる努力の累積である Chaucer

scholarship を無視することは許されえない。而も、従来の説を新しく解釈し直そうとする動きや未開拓の分野に精細な research を行なおうとする活動は、Chaucer の愛好者の絶えない限り、いよいよ盛んに行われることであろう。

19世紀の終りまでは、Chaucer に関する文献を通覧することは不可能であつたが、現在では、Miss Hammond, *Chaucer: A Bibliographical Manual* (New York 1908), D. D. Griffith, *A Bibliography of Chaucer 1908-1924* (Seattle 1926), W. E. Martin Jr., *A Chaucer Bibliography 1925-1933* (Durham, D. C. 1935) を我々は持つている。更に、中世英文学全体にわたる材料に就いては、J. E. Ellis, *A Manual of Writings in Middle English, 1050-1400* (New Haven 1916) が知らせてくれる。我々がこれらの文献から受ける便宜は、はかり知られない。その上、Modern Humanities Research Associationの*Annual Bibliography of English Language and Literature* (1920 ff.) や PMLA の *Bibliography* によつて、ほぼすべての研究を細大洩らさずに行なうことができる。初学者でも直ちに、Chaucer scholarship の中に引き入れてくれるのは、R. D. French, *A Chaucer Handbook* (New York 1927, 1947<sup>2</sup>) や Murriel Bowden, *A Commentary on the General Prologue to the Canterbury Tales* (New York 1949) である。これらによつて、我々は Chaucer 学の内容のあらましを知り、自らの好む方向に、文献を集め、研究への方向を定めることができる。然し、Chaucer においても、テキストの読みが、あらゆるものにまして、重要であり、その読みは、読む人の教養が豊かになり、知識が増し、経験が深まるにつれて、広く豊かに且つ微妙となるであろう。かくして、我々は Chaucer に教えられて Chaucer の読みを深めるが、又 Chaucer の読みが深められるのも

読む人の人間性の深まりの問題であり、学問もまた人間と共にあることを、上の数々の書物は我々に教えてくれるであろう。

最後に、私の Chaucer 研究において、本学、中世史学専攻の渡辺鼎教授から、数多の御教示を賜わつたばかりでなく、中世研究雑誌 *Speculum* を長期にわたり御貸与下さつた御寛容に対して、深い感謝の意を表するものである。

(英語学教授)

- 
- 註 1. これは Chaucer の初期伝記学者が屢々主張したところであるが、大学教育を受けたという方は現在否認されている。これに対し、法学院の一つで法律を学んだかも知れないということは、Lounsbury は否認したけれども、現在の Chaucer 学者は 'very probably true' (Robinson) と考えている。
2. R. K. Root によると 'The Learning of Chaucer', a chapter of which the serious student of Chaucer cannot afford to be ignorant. (*The Poetry of Chaucer*, p.20 ft note)
3. The Prologue to the Legend of Good Women (*PMLA* XIX, XX 1904—05)
4. "I should think it quite satisfactory to leave the lines substantially as they stand," (*Chaucer*, p.220)
5. E. G. Sandras, *Études sur G. Chaucer*. Paris 1859
6. Ten Brink, *Chaucer Studien*. Münster 1870
7. A date somewhere in the 1380's is probably the best guess (Lumiansky).
8. Il Filostrato (the Frustrated by love) (恋の虜)の詳しい要約は R. D. French, *A Chaucer Handbook* pp.141—178にある。これにより、原典の意味・調子・雰囲気を大体うかがうことができる。
9. OED s.v. Servant 4 h. Chaucer が初例、これは 'lover' の意となる。
10. Marriage Group の展開は、Kittredge, *Chaucer and His Poetry* (新版1951) pp.85—211に詳しい。

Chaucer Studies :  
A Historical and Critical Survey

---

M. Masui

---

Part 2      Mainly Interpretative

Part 1 of the present subject deals chiefly with philological studies in Chaucer, which are to be contributed to 'ANGLICA' Vol. 2, No. 3 (published by The English Philological Society of Kansai University). Part 2 given here is mainly concerned with interpretative studies of Chaucer.

The progress and development of Chaucer scholarship has, during the past fifty years, been made with rapid but steady strides. American scholarship tended to take the lead in this field. English scholarship in Chaucer seems to have reached its acme when W. W. Skeat's Complete Works of Geoffrey Chaucer was published in 1894, with its later Supplement appearing in 1897. With the new century, however, the tide turned toward the United States, where from Child and Lounsbury on many significant investigations and studies were made by a number of eminent scholars including Kittredge,

Manly, Lowes, Rickert, Tatlock, Root, Carleton Brown, Gerould, et al. To crown all, *The Text of The Canterbury Tales* (1940) in eight volumes, by the late Professors Manly and Rickert was widely recognized as the greatest achievement done in Chaucer scholarship of the first half of this century. This work was indeed a Herculean task consuming fifteen years, or thereabouts, into which these two professors poured their time, energy, and scholarship. Thus our interpretation and knowledge of this great poet have steadily increased and become profound and wide, subtle and complex, as he has been more carefully studied, a fact which shows that this century has made Chaucer by far a greater and subtler poet than any other century has done. Boldly speaking, as Professor Manly puts it, the present appraisal of Chaucer may claim the next highest rank among English poets, even higher than Shakespeare in some respects. Why this is so or how the poet has come to be so appreciated and interpreted might be inferred from what the present writer attempted in this article to describe bibliographically with comments and reviews :

1. The development of studies in Chaucer's historical environments.
2. Tendencies and changes in Chaucerian interpretation from 1900 onwards.
3. Specific studies and researches in Chaucer's individual works, of which *The Book of the Duchess*, *The House of Fame*, *The Parliament of Fowls*, *Troilus and Criseyde*, *The Legend of Good Women*, and *the Canter-*

bury Tales are treated with regard to the meanings of their themes, dates, and prevalent theories propounded by various scholars from the nineteenth to the twentieth century.

4. Recent trends in Chaucerian interpretations and studies especially since the appearance of F. N. Robinson, *The Complete Works of Geoffrey Chaucer* (1933), and P. V. D. Shelly, *The Living Chaucer* (1940), a new departure toward the interpretation of Chaucer as artist. From both works, the former being of fair and sound scholarly judgment, the latter an artistic revaluation of Chaucer, new directions can be detected, which will be more and more strongly accentuated in later works and researches on Chaucer. Especially studies in the structure, texture, style, and attitude of the poet, creative and critical, are to be noted.

5. Some suggestions toward future studies in Chaucer.

---